

## 序章

---

イエメンって  
どんな国

## ジャンビーアの国

初めてイエメンの表玄関、サナア空港に降り立ち、入国審査と荷物検査を終えてターミナルから一步出れば、あなたは、まずその風景と人々の格好のエキゾチックさに戸惑うだろう。乾いた茶色の山並みを背景にして、同じく茶色の日干し煉瓦づくりの四角い家が建っている光景だけでも充分エキゾチックである。おまけに男たちはへその前に短剣へジャンビーアをぶら下げている。この身なりには、同じアラブ人であるエジプト人でもかなり戸惑うようだから、われわれ日本人がびっくりするのは当然である。もちろんなかには西洋風のズボンをはいている者もいるが、「タクシーはどうかね」と言い寄ってくる運転手はたいてい、裾の広がったワンピース服に幅広のベルトを締め、体の正面にジャンビーアをさした格好でターミナルの出口あたりにたむろしている。イエメンの風景といえば、まずこのジャンビーアのある風景である。

一目見てかなり奇異な感じがするのは、このジャンビーアの納まっている鞘の形状のせいである。ジャンビーアをさしている男を正面から見ると、へその前に大きな釣り針のお化けをぶら下げているようにも見える。鞘はいちばん太いところで幅が一〇センチメートルほど、厚さは一・五センチか二センチメートルほどしかないのかかなり薄べったく、形状は下に行くほど細くなりながらくると上にはねている丁字状で、先端は尖っている。鞘は細い皮紐でベルトの内側に縫いつけられており、刃の入り口は、ベルトよりも上に真横に開いている。薄い鞘な



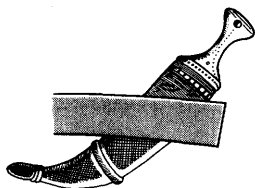
長衣（ソウブ）に背広，ジャンビアは  
イエメン人の標準的な服装である。

のでへその前にさしてもそれほど邪魔ではない。

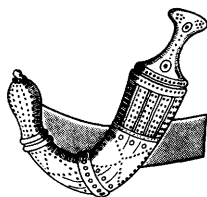
もちろん中に入っている短剣自体はけっして「J」字状をしているわけではなく（そんなに刃が湾曲していたら鞘から出せない）、かなり太った三日月の下半分といった形で、刃渡りは普通二〇〜二五センチメートル程度である。柄（つか）の部分もまた独特の形状をしている。刃との接合部分が最も幅広で一〇センチメートル程度、そこから上に向かって急激にくびれ、柄の中央で二〜三センチメートルになり、そこから再び膨らんで柄頭は七〜八センチメートルになっている。柄全体の長さは一〇〜一五センチメートル程度である。柄頭には割合に幅と厚みがあり、高さはみぞおちのあたりなので、掌をのせて休めるのにちょうどいい。

ジャンビアは短剣だから武器として用いようと思えば使えるが、現在では武器としてよりもむしろ男らしさの象徴として身につけられている。ライフルが成人男子

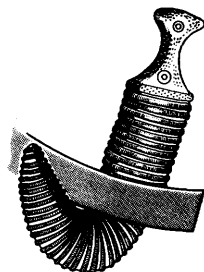
# ジャンビアーを収める鞘の形状



1. スーマ (Thūmah)  
サイイド, カーディー,  
商人などが着用。



2. アシーブ ('Asib) ①  
銀で外装されたもの。サイイド,  
シェイフなどが着用。  
(出所) Sana'a, p. 255.



3. アシーブ ('Asib) ②  
一般用。鞘は革で  
外装されている。



4. ジャンビアー, あるい  
はスーマ  
ムザイインなど低い階層に位  
置づけられる人が着用した。

の数の二倍以上あるといわれるこの国では、ジャンビアーは武器としてはそれほど役にたつまい。それに最近のジャンビアーはステンレス製で、ほとんど刃がたつていないので、刀としては小包の紐を切る程度の実用性しかない。

ジャンビアーを身につけるのはイエメン山岳社会にあつては、一人前の戦士であることのあかしである。ジャンビアーは誰でも身につけられるというものではない。まず第一に、女はジャンビアーを持てない。ここでは女は戦士たり得ないからである。第二に、子供はジャンビアーをさせない。部族

間抗争のときに戦士としてはまだ働けないからである。イエメンでは男の子は通常十四、十五歳で一人前の戦士として認められ、ジャンビアーやライフルを身につけるようになる。第三に、低い階層に属する人はジャンビアーをさせない。彼らは戦士としての権利と義務と勇気をもっていない、とされているからである。だから、ジャンビアーをさしているということは彼が男であり、成人であり、一人前の権利と勇気を有する部族民であることを物語る。

多くの男がジャンビアーをさしているのを野蛮な風習と言う人もいるが、考えてみれば、日本でもほんの百二十年前までは武士はみんな刀をさしていたのだ。そして日本で刀が武士の魂であったように、ジャンビアーはイエメン男性の誇りの源泉なのである。

由緒正しい家柄に先祖代々伝わるジャンビアーともなれば、百年以上の年代物もあり、柄や鞘にはさまざまな装飾が施されていて、日本円にして時価数千万円というものも珍しくない。ただし刃にはあまり価値を見いだしていないようだ。そもそもジャンビアーは武器としてよりも地位の象徴としての意味合いが強かったのであろう。また先が跳ね上がらない鞘もあって通常「スーマ」と呼ばれ、イスラム教の預言者ムハンマドの子孫（サイイド）と言われる人々が身につける場合が多い。スーマの鞘は細かい模様の施された銀で覆われ、装飾品としての価値は高い。これは通常体の正面ではなく、右の腰にさすことになっている。

刃がたっていないとはいえ、その気になればジャンビアーで他人にけがを負わせることはで

きる。それではあんまり物騒なので、みだりにジャンビーアを抜かないようにルールがある。たとえば口げんかをしているときに、ジャンビーアの柄に先に手をかけた者は負けだという。形勢が不利だからといって安易に武器に頼るのは恥ずべきことなのである。

逆にひとたびジャンビーアを抜いたならば、相手を殺さ

ずに鞘に納めるのも恥である。ジャンビーアを抜くからにはそれだけの深い考えと覚悟が必要なのである。このあたりは、日本の武士と日本刀の関係を思い起こさせるものがある。ここではジャンビーアは男の度量を象徴しているのだ。イエメンでも短気は軽蔑されるべきものとされており、この自制心を信頼できるからこそ、われわれはイエメンの町を安心して歩けるのである。一方、部族長が部族民の前でジャンビーアを抜くときは、他の部族との戦闘開始を意味



宗教的な知識人は先の曲がらないジャンビーア（スーマ）を身につける。数珠も礼拝のための必需品である。サナア旧市街にて。

する。

また取っ組み合いの喧嘩が起きて長老などが仲裁に入るとき、彼はまず喧嘩している双方に「ジャンビアをよこせ」と命じ、二人のジャンビアを預かるところから裁きを始める。ジャンビアをふりまわしてけがをするのを防ぐためではない。ジャンビアを預けるのは長老に仲裁を一任し、その裁きに服従するという意志を示すのである。この場合、ジャンビアは男の自立心の象徴であり、日本でいえば「下駄を預ける」ということになるか。ジャンビアを預けている間は停戦状態であり、この間に停戦を破れば調停者の顔に泥を塗ることになり、恥ずべきことと見なされる。このあたりの考え方は、日本人にもよくわかるような気がする。

### モカ・コーヒーの国

イエメンがモカ・コーヒーの故郷だということを知っている人は意外に少ない。モカというのはイエメンの紅海沿岸にある港町の名前である（口絵地図参照）。今はすっかりさびれてしまって、往時の面影はないが、モカはかつて世界最大のコーヒー積出し港として世界中にその名を轟かせたものである。ヨーロッパ世界で人々がコーヒーを飲みだしたのは十七世紀以降だが、当初そのコーヒーを一手に輸出していたのはイエメンであり、モカであった。そういうわけで「モカ」はコーヒーの代名詞となったのである。

今でもコーヒー味のケーキやアイスクリームのことを「モカ」と呼んだりするのは、この名

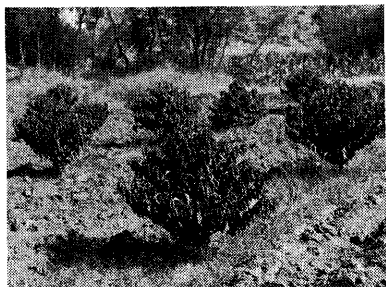
残りである。日本でも「モカ」という名前の喫茶店はいぶんあるが、その「モカ」のご主人たちのうち、これがイエメンの港町の名前だとご存知の方はどれくらいいるだろう。またモカの最上級品に「モカ・マタリ」があるが、これはイエメン山岳部の「バニー・マタル」地方でとれる豆である（口絵地図参照）。

さて、もしこのことを知ってイエメンを訪れたなら、「きつとおいしいモカ・コーヒーが飲めるはずだ」と期待して早速喫茶店を探すにちがいない。ところが、イエメンには喫茶店というものがない。特に首都サナアでは町なかでモカ・コーヒーを飲もうと思ってもまず不可能なのだ。

日本なら喫茶店、ヨーロッパあたりならカフェとかティールームというような場所があつて、町なかでひと休みできる。また同じ中東でもエジプトなどでは「マクハ」と呼ばれる喫茶店があつて、男どもがコーヒーを飲みながら、水パイプのタバコをくゆらせつつおしゃべりをしていくという「中東的」風景が町の辻々に見られる。こうした「マクハ」は歩道にまで椅子がはみ出し、通りかかる人たちも会話のなかに気軽に入っていきける。こういう店がサナアにはほとんどないのである。だから、町なかで外国人のくつろげる場所がない。

そもそもイエメンの町は、初めのうちなんとなく取っつきにくく見える。第一に、たいていのイエメン人は見た目にかなり無愛想なのである。たとえばスーク（市場）や繁華街を歩いて





イエメンのコーヒーの木は原生種に近い。大規模なプランテーションはなく、小規模な畑がほとんどである。ハイマーにて。



コーヒーの実。この中に果肉に包まれて二つの豆が向かい合わせに入っている。イエメンでは外皮（ギシル）も飲用になる。

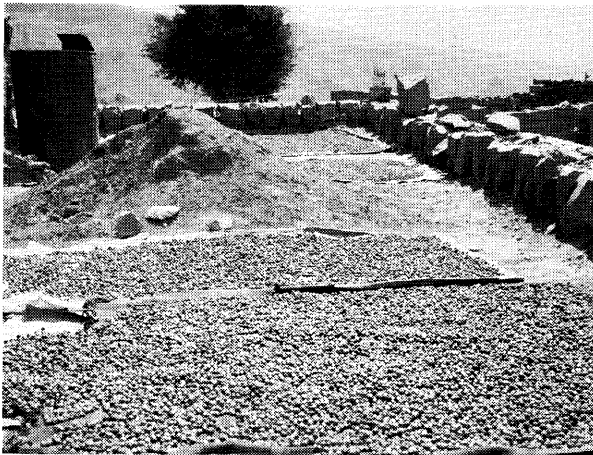
いても、にこやかにすり寄って来てものを売りつけたり店を紹介したりするなれなれしい人間にはまずお目にかからない。外国人が歩いていると、むしろうさん臭そうな視線を感じる。商人でさえ無愛想な人が多い。店先に人が立っても、特に一生懸命売り込もうとするでもなく「買ってくれなくてもいい」といった顔で座っている。われわれが商品を手にとって眺めていると「何しに来た」というような顔でじろりと睨まれる。素朴さと警戒感のなせるわざなのだ

が、無愛想な印象は免れない。

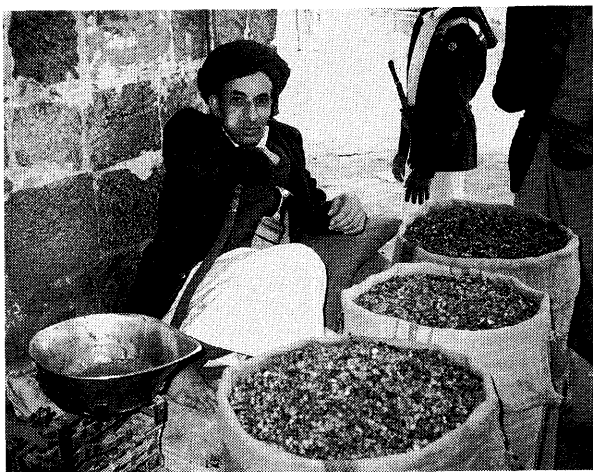
こうしたことに加えて、町なかに喫茶店がないこともサナアの町の第一印象をさらに無愛想なものにしている。喫茶店がない理由はいくつかある。

理由のその一。イエメン人は人なつこいほうではない。恥ずかしがり屋で、人見知りをするので、だれかれ構わずおしゃべりをしたりはしない。相手が外国人に限らず、イエメン人どうしても他人に対する警戒心が強いので、町かどでにこやかにおしゃべりに興じている姿には、まずお目にかからない。

もちろんイエメン人も本当はおしゃべりが好きである。ただ人見知りがはげしいので、町なかの喫茶店で隣どうしになっても、この馬の骨とも知れぬ人とはおしゃべりしない。



コーヒーの実収穫後、家の屋上で乾燥し、その後豆と殻に分離する。バニー・マタルにて。



ギシル売り。ギシルの入っているのはコーヒーと同じ麻袋（60キログラム入り）。秤売りの単位はロトル（約500グラム）である。サナアにて。

だから喫茶店がないのである。

理由のその二。コーヒーは大事な輸出品なので、庶民の口には入らない。実際、イエメン人がレストランで食事と一緒に飲むものは圧倒的に紅茶である。普通のレストランにはコーヒーなどおいていない。外国人向けのホテルにはあるが、ネスカフェのほうが一般的である。家庭でコーヒーを飲むことは滅多にない。好んで飲むのはコーヒー豆の殻を煎じた「ギシル」と呼ばれる飲み物である。イエメン人は外国人に説明するときにこれを「イエメン・コーヒー」と呼んだりするが、コーヒーとはまったく違う味である。ギシルの味つけは家庭によって違うが、普通はショウガの粉少々と大量の砂糖を混ぜる。ギシルは日本で言えば

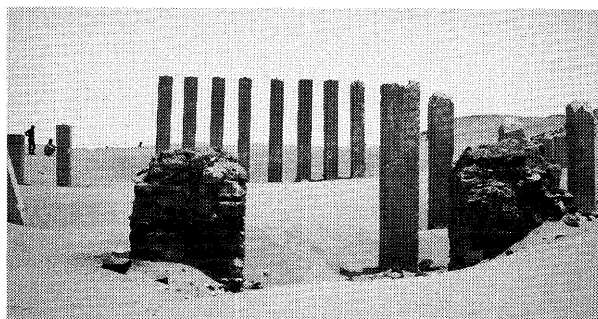
番茶に当たる日常的な飲み物である。もつとも今では、ギシルとコーヒー豆の一キログラムあたりの値段は同じか、場合によってはギシルのほうが高いこともある。

理由のその三。サナアは暑くない。高原都市サナアは年平均気温が二五度ときわめて快適な気候である。だから戸外で涼みながらおしゃべりをする必要がない。イエメンのなかでも紅海沿岸の港町ホデйда、インド洋に面したアデンなどでは、男たちが夕涼みをしながら紅茶を飲んでいる光景をよく見かけるが、夜が冷え込むサナアでは、人々は家の中でくつろぐ。

理由のその四。そしてこれが決定的な理由なのだが、「カート」というものがあるから。「カート」とは噛むと軽い興奮作用をもつ葉っぱで、友人や親戚の家で行われるカート・パーティーがイエメンの社交の中心である。イエメンではおしゃべりはカート・パーティーの場であるものなのだ。カート・パーティーは毎日のようにあり、喫茶店でおしゃべりしている暇などないからコーヒー、紅茶を介した社交の場は不要なのである。需要がないから喫茶店がない。

こういうわけで「モカ」の故郷でありながら、これまでイエメンでは喫茶店が流行らなかつたのである。しかし、若者たちが欧米風の町にあこがれているのはどこの途上国も同じである。サナアにもハンバーガー屋とかピザ屋とかフライドチキン屋などがぼつぼつ店開きしはじめており、近いうちにコーヒーショップが繁盛するようになる可能性は高い。

モカの祖国のこの国に「モカ」という名前のしゃれたコーヒーショップができて、そこで本



「月の神殿」と呼ばれるマーリブの宮殿跡の石の柱列。  
これは二階部分で、一階は砂の下に埋もれている。

物の「モカ・マタリ」を味わえる日も遠くないかもしれない。

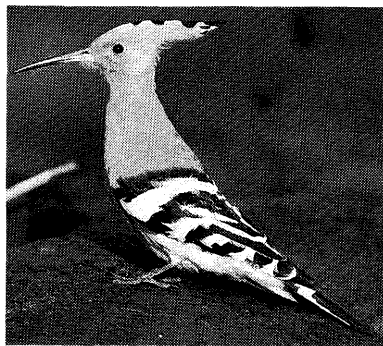
### シバの女王の国

日本人に馴染みのないイエメンを語る  
とき、なんとか身近に感じてもらうた  
めに「モカ・コーヒー」とならんでいつも引き合いに出さ  
れるのは「シバの女王」である。「シバの女王」という歌  
のタイトルは聞いたことがある人も多いだろう。なんとな  
くエキゾチックな雰囲気のある語感がいいし、せつなく悲  
しげな、美しい旋律は日本の喫茶店のBGMの定番といっ  
てよいほどポピュラーである。しかしシバの女王が実在の  
人物だったと知っている人はあまり多くない。ましてや、  
いったいいつごろ、どの辺にいた人かなんて知らない人が  
ほとんどであろう。「私はあなたの愛の奴隷」という日本  
語の歌詞からだけでは、あんまりイエメンという国とのつ  
ながりは想像できないかもしれない。しかし、シバ王国と  
は、古代南アラビアに実在し、栄華を誇った一大王国であ

った。その国土は現在のイエメンにほぼ重なる。首都であつたマールリブ（口絵地図参照）には今も当時の石造りの宮殿跡が残っている。

「シバの女王」はシバの女王とソロモン王とのラブロマンスを描いた映画の音楽である。そしてこの映画のもととなる物語は旧約聖書に述べられている（列王紀上第十章）し、これに対応する話はコーランにも記されている（第二十七章「蟻」）。

コーランによればことの顛末はこうである。ソロモン王は古代イスラエルの王でダビデの子、その叡知と権力で有名であつた。ある時ソロモンは精霊、人間、鳥類からなる大軍勢を率いて行軍していたが、鳥のなかにヤツガシラの姿が見えない。ソロモンはヤツガシラの不参に憤っていたが、まもなくヤツガシラが戻ってきて言うには「私はあなたのまだご存じないことを聞き及んで参りました。サバ（これがいわゆるシバである）の国ではたいへん金持ちの女王が国を治めておりますが、あろうことか彼女は神をあがめず太陽をあがめております」（ソロモンはイスラエルの王だがコーランでは「アッラー」を正しく崇拜する者として現れ



ヤツガシラの成鳥

ている)。そこでソロモンはシバの女王にあてて自分に恭順するようにとの手紙をしたため、ヤツガシラに運ばせた。シバの女王は国の長老たちと相談の上、まず贈り物をして様子を見ることにした。しかしソロモンは贈り物突き返し、女王が来なければ大軍で攻め入ると威嚇する。そこでシバの女王はさらに大量の贈り物、それぞれが兵を率いた千人以上の王、将軍を引き連れて自らイスラエルに赴いた。この隊列はあまりに長いので先頭のラクダが発してから、最後のラクダが発するまで丸三日かかったとも言われる。また旧約聖書には「彼女は金一二〇タラントおよび多くの香料と宝石とを王に贈った。シバの女王がソロモン王に贈ったような多くの香料が再び来ることはなかった」と記されている。

こうして両者はソロモンの王宮で会見し、知恵比べが行われる。その結果、シバの女王はソロモンの富と英知に感服し、また宮殿の壮麗さに心うたれる。ソロモンもシバの女王の知恵に感心するのである。会見は成功し、最後にはソロモンはシバの女王の「望むものはすべて」与えて彼女は帰国の途につく。旧約聖書とコーランで語られている物語はここまでであるが、エチオピアに伝わる伝説では、この会見のときにシバの女王はソロモンの子を身ごもり、彼女はエチオピアで珠のような男の子を産みおとす。この子が、それ以後一九七四年までエチオピア帝国を連綿と支配しつづけたハイレセラシエ王家の始祖となるのである。なんと壮大なラブロマンスではないか。

ただし、この伝説が史実かどうかについては異論がある。なぜなら、ソロモン王は紀元前十世紀頃に実在した人物だが、現在発見されている考古学的な資料からは南アラビアのシバ王国の存在は紀元前五―六世紀くらいまでしか確認されていないからである。だからこの伝説に登場する「シバ」の国が南アラビアのシバ王国かどうかは特定できないというクレームが存在する。またエチオピア版の伝説では、そもそもシバの女王はエチオピアの人だということになっている。

しかし、この伝説のような出来事が発生する必然性は、古代アラビアに存在した。南アラビアの王国（それはシバ王国以前の別の国であったかもしれないが）は紀元前十世紀頃からインド洋経由で渡来するインド、東南アジア、中国、さらにはアフリカからのさまざまな香料・香木、絹、鳥の羽、さらには奴隷などを地中海世界の諸国に運び大きな富を築いていた。いわゆる「香料の道」の支配であり、このためにラクダの隊商が活躍していた。そのルート上にマリーブがある。すなわちシバ王国は中継貿易で栄え、通商路を支配することで富を築いたのである。その主要な顧客の一つがソロモンの王国であった。そしておそらく双方の経済力・軍事力の及ぶ領域が拡大していく段階で、両国の衝突・摩擦が発生したのである。あるいは商品の価格をめぐる経済摩擦であったかもしれない。この問題を外交的に解決するために両国の首脳会談（つまりサミットである）が開かれたのだろう。その登場人物がソロモンであったか、シバの



女王であったかは実はどうでもよいのである。史実としてこのような出来事があり、それが後に史上の有名な人物に結びつけられてこの伝説ができあがったのだろう。

また、なぜシバの女王が帰国に際してエチオピア経由で帰ったかについても、背景となる歴史的事実がある。それは、古代南アラビアの王国は、紅海の対岸であるエチオピアに植民地をもっていたのである。われわれは地理の授業で、アフリカと中東を別々に習うので遠く隔たったものと思いこみがちだが、イエメンにとってエチオピアは隣人である。実際にイエメンの歴史のなかでは、エチオピアに植民地をもったこともあれば逆にエチオピアの侵略を受けたこともしばしばあるのである。また当時南アラビアで用いられ遺跡にも刻まれている言葉は南方アラビア語であり、現在のアラビア語（北方アラビア語）



マーリブのダム基礎石に刻まれた古代南アラビア文字

とは異なるが、現在のエチオピアの主要言語であるアムハリックは南方アラビア語系の言語なのである。したがって、シバの女王がエチオピア経由でイエメンに帰ろうとしたとしても不思議ではない。

ともあれ、イエメン人にとってはシバ王国（およびその他の古代南アラビア王国）はただの昔話ではない。三千年を遡る輝ける歴史をもっていることは、アラブの源流としての彼らの誇りを裏づける。シバの女王に象徴されるこの歴史の古さは、イエメン人のアイデンティティーのよりどころとして、一人ひとりの心に深く刻み込まれているのである。